



## 祖母の微笑み

受賞者：隅田 優子さん

私は現在、看護師長として勤務している。看護師として30年近く働き続けているわけであるが、今でも私が看護師を目指す原点となった看護婦さんの姿が忘れられない。仕事で心が折れそうになった時、いつの時もその看護婦さん进行を思い出すのである。

私が小学5年生だったある日、両親より祖母がくも膜下出血で危篤のため、面会に行くことを告げられた。大好きな祖母の危篤の知らせで、心臓がドクドク鳴るのが自分でもよく分かった。病室に入ると祖母には人工呼吸器が装着されていた。部屋には呼吸器の音などが響いている。祖母は目を閉じ、口には管を入れられ、口も曲がっているように見える。大好きな祖母なのに、衝撃が強く、怖くなつて全く近づけなかった。そこに看護婦さんがやってきた。

全く動くことのない祖母に向かつて、突然話し掛け始めたのである。「ちよつと横を向きますね。大丈夫ですか」。なぜ反応のない人に話し掛けるのか、全く意味が分からなかった。びつくりしている私に気付いた看護婦さんは「おばあちゃんの手握つてあげる?」と私に優しく話し掛けて下さった。私はびつくりしたが、看護婦さんと一緒に祖母の手を握つてみた。するとまたその看護婦さんは「良かったですね。お孫さんが来てくれて」と祖母に話し掛けるのである。小学生の私からすると衝撃でしかなかった。この看護婦さん大丈夫かな? とさえ思った。しかし、祖母の顔は微笑んでいるようにも見えるのである。「目は閉じていても、耳は聞こえているのよ」と看護婦さんは私にそつと教えて下さった。そうか、耳は聞こえているんだ。そこから祖母に積極的に話し掛けるようになった。そのたびに口には管が入っているのに微笑んでいるように見えるのである。祖母が息を引き取つたのは、その数日後であった。目を覚まさない祖母に、私の声が聞こえていたか確認することはできなかった。またあの世で祖母に会ったら、確認しようと思つている。